

故郷の異邦人

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻

郭 馳洋

桜が咲き始めた三月の下旬、東京のアパートで窓の外を眺めると、暖冬最後の冬らしさを主張するかのように雪が降っている。僕にとって雪が見られるのは日本にいるときに限る。冬でも軽々と 20 度を超える日の多い故郷では雪なんか降らないからだ。

大学三年生の頃、交換留学生として筑波大学に一年間在学していた。はじめて日本に来たのはそのときだった。交換留学の申請は大学二年目の後半に始まったが、地元の大学に入学して二年近く経ってから、ようやく大学生生活に馴染みはじめた僕は留学なんかに乗り気ではなかった。留学を熱望した意識高い系のルームメイトに付き添う形で申請書を提出したものの、早くも煩雑な手続きに頭を抱えた。とはいえ、「こんないいチャンスめったにないんだよ。今のうち行かないと後悔するぞ」と先生方から何度も言われたし、どうせ一年だけだから、人生に一度ぐらい非日常的な異国体験ができるのも悪くないと思い、逡巡しながらもなんとか手続きを最後まで完了させ、留学に旅立った。そして留学先での勉強生活を通じて学問の世界に興味を抱き、研究したいことも見付き、結果的に日本の大学院への進学が決まった。

大学院は甘くない、けれど数年辛抱すれば学位を取って帰国し、元の日常生活に戻れるはずだ。そう思っていた僕は大学を卒業したあと再び日本に渡り、修士課程を修了し博士課程にあがり、気づいたら六年半の歳月が流れた。ところがいつからか、自分のなかで「日常」と「非日常」が逆転しはじめたようだ。狭いアパートでの一人暮らしと大学院の研究生活は日常的になってきて、スケジュールは大学や学界の行事で埋まっている。一時帰国は年に一回か二回程度で、帰ったあとも相変わらずレポートや論文で忙殺されていた。いったん街に出ると、かつて見慣れた景色をどこかよそよそしいと感じてしまい、近所の市場で買い物する際にぎこちない方言を操っている自分がいた。町並みに関する記憶も、地図で確認しないと同窓会が開かれる有名な店の場所すら分からないくらい薄れている。どうやら僕は、自分の故郷の異邦人になったみたい。

そこでふと思った。故郷とはなにかと。そもそも、南中国の沿岸部に位置するこの都市は僕にとって果たして故郷といえるだろうか。たしかにここに両親が住んでいる。その意味で実家というのは間違いない。だが故郷はたぶん実家以上の何かである気がする。それは、明確な輪郭を持たないにせよ、「家」を取り巻く一個一個の原風景を掻き集めたようなものではないか。しかしいま、心のアルバムをめくっても、思い出の写真はそれほど出てこない。

というのも、この都市に住んでいたのは中学三年から高校三年まで、せいぜい四年間なのだ。一つの場所を故郷として胸に焼き付けるには四年という時間が短すぎたかもしれない。それ以前はずっと都市部からやや離れた小さな町（行政区画では同じ「市」の管轄下にあるが）で暮らしていた。中学二年の夏、親の転勤で引っ越しと転校を余儀なくされた。そのとき、仲間との別れや新しい環境への不安に苛まれ、大きな抵抗感を覚えた。引っ越し先のすべては新参者の僕にとって疎ましい存在だ。毎日のように元の町に帰りたくて駄々をこねて、実際何回か戻ったこともある。そしてあそこそ真の故郷だと思っていた。

しかしやがてインフラ整備や大規模の改築工事が続々と行われ、町の雰囲気はすっかり変わり、昔の知人たちも相次ぎ引っ越しした。あの故郷に帰ったところで、親しみのある人も物もはや見当たらない。少し大人になったためか、単に十五歳の自分を裏切った結果か、僕はあるときからあの町に帰ることを口にしなくなった。かといって、高校を卒業し大学に行くまで、ついに「新しい故郷」に馴染むこともできなかった。なるほど、現実の物理的な空間を占めた故郷には大した



(写真 故郷の山水)

た思い入れがなく、思い入れのある故郷は過去の時間にしか存在しない。帰郷という言葉さえ空しくなるほど、故郷という存在が抜け殻のようになっている。僕は期せずして故郷の喪失といういかにも現代人らしい宿命を自分なりに体験することになった。

窓を開けてみると、雪が止んだ。季節は移ろおうとしている。もう少し、淡い郷愁を誘うこの移ろいを味わいたいものだ。